

外語大の将来とテニス部

硬式テニス部長
中嶋嶺雄教授

硬式テニス部男女役員と、部長とは名ばかりでその職責を十分に果たせないので悩んでいる。との恒例の新年度会見が先日あった。夏まではまだ時間があるというのに、すがり日焼けた役員諸君と対面している。青春が跳ねているようで、若者はいいものだ。つくづく思う。

それにしても、最近硬式テニス部も他の運動部並みに部員不足に陥っているようだ。外語大入学者のセオリーセント近くが女子学生である現実を考えれば、男子部員の不足はいわば構造的な現象ともいえる。だが、それだけに各人の練習量はたぶりあるのだし、往年のように入部員が多くてコートで実際に打球にふれる時間から、そこは量より質で今年も大いに頑張った。もう一つは量より質で今年も大いに頑張った。

外語大は、いま二十一世紀をまえに脱皮し、新しい時代の切り開いていくべき模索期にある。だが、世の中の動きが激しいので、いつまでも模索を続けていてよいというわけにはゆがばいだろうし、このあたりで明白なアイデンティティーを確立し、大きく飛躍すべきたと思う。大学入試ではAグループになつて

いるのだから、Aグループの雄として世界に誇るべき国際学ないしは外国研究の総合大学になるべきではなからうか。幸いにしても、いま外語大では新キャンパスへの移転問題がもたらがっている。私も移転問題研究委員の一人であるが、広大なキャンパスに昼休みには、同室の外国人客員教授と気軽にテニスが出来る、といった大学に是非なつてほしいものだ。もちろん、テニスコートもどんどん増えるのだから、外国人が来ても十分にプレイできるだけのものになつていくべきであらう。そこでもわが硬式テニス部の諸君が日常的に国際親善試合が出来るというような大学にしたいものである。

一九八七年六月十九日



東京外国語大学硬式庭球部